

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 戦前・戦後期における国史学会の活動と教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, みのり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000695">https://doi.org/10.57529/0002000695</a>

## 戦前・戦後期における国史学会の活動と教育

齊藤みのり

### はじめに

國學院大學では現在、国文学会・神道宗教学会・中国学会・法学会等様々な学会が活動している。国史学会もその内の一つで、戦前から活動している長い歴史を持つ学会でもある。

戦前からの学会活動という点では、大正三（一九一四）年に発足した国文学会や、昭和五（一九三〇）年発足の漢文学会（現在の中国学会の前身）<sup>(2)</sup>等が早くから活動を開始しているが、その中でも国史学会は、國學院大學でも古い歴史を持っており、明治四十二（一九〇九）年に発足している。これら諸学会は、國學院大學の研究者及び学生達の研究活動に深く関わる組織であり、同時に彼らがその研究を発表する場として長らく重要な役割を果たしてきた。一方で、これだけの歴史を持つ組織の活動は、初期からその形態を変遷させていると推測される。国史学会も例外ではなく、特に発足から終戦までの活動は現在と異なるところも多い。また、大学において学生教育は主な役割の一つであり、当然その機能は主に授業によるところが大きい。しかしながら、国史学会は学内団体としての性格もあり、学生への教育指導に関して大きな影響があったと考えられる。

そこで本稿では、戦前から戦後期の国史学会における具体的な活動を追い、その変遷を確認した上で、学会内で行

われた教育活動について注目し、実態を把握することを目的とする。なお、百年を超える歴史を持つ国史学会の活動全体を把握することは難しいため、本稿では学会創立五十周年を迎えた昭和三十四（一九五九）年までを区切りとし、その活動を明らかにしていく。

## 一 国史学会の発足と『国史学』創刊

### ① 国史学会の設立

はじめにでも触れたように、國學院大學の国史学会は当時の国史学科の学生らの発起で、明治四十二年十一月二十八日に発足した。国史学会発足に際しては、当時の國學院大學講堂において開会式が行われており、来賓・会員合わせて三百余名が参集、会長三上参次の挨拶、佐佐木学長の祝辞（畠山評議員代読）の後、文学博士井上頼圀「落合氏の学統」、大槻文彦「伊達騒動実談」、男爵石黒忠恵「歴史家に対する希望」の講演が行われた。<sup>3)</sup> なお、この開会式には小笠原長生のような軍人や、古城貞吉・高橋健自・喜田貞吉・辻善之助・和田英松ら諸学者、史学会委員・日本歴史地理学会委員、万朝報・国民新聞等の記者も参集している。<sup>4)</sup>

国史学会発足当時の会則は以下の通りである。参考までに記しておきたい。

### 【史料①】<sup>5)</sup>

第一条 本会を国史学会と称す、

第二条 本会は国史の研究を以て目的とす、

第三条 本会の目的を達する為、一、五、九月の三期に研究会を開き、三、十一の二期に於て講演会（公開）を催す、但し研究会を以て史蹟の实地調査に充つる事あるべし、

第四条 本会は通常会員及賛助員を以て之を組織す、

第五条 通常会員は國學院大學学生及其卒業生と校外に於ける一般有志者とを以て之れに充て、賛助員は本会の主旨目的に賛同するものを以て之れに充つ、

第六条 会務は役員として会長一名、評議員五名乃至十名及委員六名を置きて之れに統べしむ、（以下四か条省略）

年三回の研究会と年二回の公開講演会を行い、その研究成果を発表する形であった。また、既にこの段階で史蹟調査に関する記載があった。史蹟調査に関しては三章で触れるためここでは詳しく触れないが、戦前の国史学会の重要な活動であった。

発足以後、機関誌である『国史学』創刊までの学会活動については、『國學院雜誌』より確認ができる。翌年二月六日には初めての講演会を行い、大森金五郎の「国史の研究と歴史地理」、萩野由之「韓国旅行談」の発表が成され、百名を超す来聴者があった。<sup>(6)</sup>以後、講演会に関して、明治四十三年十一月六日の公開講演会では二百名程、<sup>(7)</sup>同四十四年五月十四日の公開講演会は二百五十名の聴衆を集めたが、大正期の中頃から見えなくなっていく。その他、大正四年九月には国文学会との連合大会も開催している。<sup>(9)</sup>一方、研究例会に関しては、例えば明治四十四年九月二十三日は研究懇話会と題して、今西龍「上代日韓非同域説」、三浦周行「国史研究の趨勢」の発表が行われている。<sup>(10)</sup>研究例会に関しては継続して行われており、山本信哉、植木直一郎、松井等、八代国治ら多くの研究者が報告している。<sup>(11)</sup>

究例会は平日の夜六時頃より行われたので、閉会が夜十時頃になる事もあった。<sup>(12)</sup>しかし、大正五年以降になると、学会活動は停滞気味となり、大正末の研究会は学生の研究発表を主とし、発表の後教授による講評が行われていたといふ。<sup>(13)</sup>

ところで、国史学会が発足した同時期は学内の他学会も発足している。国語学会は明治四十四年六月に、<sup>(14)</sup>国文学会も大正三年五月に発足した。<sup>(15)</sup>但し国文学会はこの当時、三矢教授の許での個人的な団体で大学の公のものでは無く、昭和三年の確立を待つこととなる。<sup>(16)</sup>その他、戦前國學院大學の主要学会の一つであった道義学会は、少し遅れて大正十四年の秋に発足した。<sup>(17)</sup>また、学外においても同時期は明治四十三年に慶応大学の三田史学会、同十四年に早稲田大学史学会が発足している。<sup>(18)</sup>

明治おわりから昭和初期は、学会発足が大学内で盛んになり、学外でも私学史学会の勃興期であった。国史学会はその中でも早期に活動を開始していた一方、長らく機関誌が無く、また、研究者の発表の場としての地位を確立しつつも、大正末期はその活動も停滞気味であった。しかしながら、学生の研究発表が主に行われていた事実は、教員と学生による研究・教育の場としての基礎が固められていたと言える。とはいえ、本格的な学会活動の充実は、『国史学』が発行された昭和初期を待たねばならなかった。

## ② 『国史学』 発刊

先述の通り、活動が停滞気味であった国史学会だが、大正の末年頃より機関誌刊行を志向しており、昭和四年十一月、機関誌である『国史学』の第一号が発刊した。第一号には三上参次会長の発刊の辞の他、沢田章「和糸問屋の研究」、井野辺茂雄「幕末における通商政策の発展」、奥野高広「庄園制度の崩壊経路の一例として観たる備後国大田庄

について」が論文として掲載された。

機関誌発刊に関する活動の中心は、『国史学』創刊号に「雑誌の発刊も一昨年あたりから、当時の学生委員の間から其の議が登つたのであつたが」とあるように、当時の学生達であった。『国史学』創刊号には、「学会の改革に就いて」と題して、次のような文章が掲載されている。

【史料②】<sup>20</sup>

最初本学会が創設せられてからは、もはや大かた二十星霜を經過したらうと思はれる。此の長い年月の間に、会の基礎は自ら堅固になつて来たのではあるが、其の間には会の事業の上に、時として隆替のあつたことは免れないことである。三上会長の下に故八代国治博士が中堅となつて活動せられた頃は、其の最も隆盛を極めた時であつて、毎例会には会衆が堂に溢れ、屢々立派な研究が発表せられて、慥に学界に多大の寄与をしたのであつた。然るに最近数年の間は稍下火の形となつて、主として学内有志によつて、会務が維持せられて来たので、自然はかゞしい事業も出来なくなり、茲に本会の革新の必要を唱へられることとなつたが、其の第一声を揚げたのは学生委員であつて、教職にある者の側でも、本学の学制上の欠陥を、本会によつて補足せんとする希望を抱くものも往々出で、今春屢々会談の結果漸く議が熟して、遂に別掲の如き新会則を定め、本会に最も関係の深い者数名が評議員となり、学生及び新進の出身者の内から若干名の委員を選び、三上会長の下に、大いに会務を拡張することとなつた。会計の事は若手では困るので、特に高橋隆三君に御面倒を御願ひした。

創設当初は活発であつた学会活動も、ここ数年は下火になっていたが、学生会員達の強い要望が教員達を動かし、

会則の改正や会務の拡張が行われたことが記される。『国史学』の発刊も、これらの活動と相まって行われたと言える。当時の学生達の熱意が窺える。

『国史学』発刊に関わった國學院大學名誉教授の岩橋小弥太は、当時について次のように述懐している。

【史料③】<sup>(21)</sup>

上級生に当山俊道といふのが居り、その下級に奥野高広、藤井貞文、村田正志の諸君が居つたが、当山はボスで他の学生を指揮して研究会を作り、どういふ訳か新米の若いわたしを相談役とした。古い教授植木直一郎、松井等君等は近頃妙な会が出来てなど明に不愉快を示してゐた。当山は雑誌を発行しようといふ。わたしは京都大学に於ける史林の苦い経験から、維持の資金、原稿の募集等いろ／＼苦勞の多いことを説いたが、当山といふ男は言ひ出したらなか／＼後へは退かない。三上先生のところへ相談に行つて、やつたらよからうといはれたといひ、沢田章図書館長はやれ／＼、資金が不足すればわしが出してやるといはれたので、遂に発行することになつた。雑誌の名を国史学とし、題簽を三上先生に書いて頂いた。雑誌責任者は不知／＼わたしになつてしまつた。わたしが最初想像した通り、経営が極端に困難であつた。何分史学の学生が少ない上に雑誌を只取りするものが多く、それかといつて沢田氏に頼るわけにも行かず、その沢田氏も死んでしまつた。殊に原稿の書手が無く、毎号同じ顔触れの投書で何とか雑誌の経営をやつていつた。わたしの苦心は並大抵ではなかつた。その間に史学の学生も段々増して来る。毎月の例会も漸く盛になり、雑誌の購置者も増し、漸く経営の緒に着き、遂に百号を越える程盛となつた。

学生の動きに三上や沢田ら教員が応え、『国史学』が発刊されたことがわかる。一方で、発刊直後の経営難についても触れており、実際『国史学』創刊号にも、「最初に御願致して置きたいのは、今日の処、まだ会員が甚だ少いので、随分無理な精一杯の仕事をしてゐるのであるから、少しでも会費の滞納があれば、忽ち蹉跌を来たすのである。他の学会の様にゆつくりした事は出来ないから、予め会員諸賢の同情ある御諒会を希望致すのである。」<sup>(22)</sup>とあり、以降も再三会費の納入を求める等、発刊当時の苦勞が窺える。しかしながら、国史学会の本格的な活動はここから始まり、史学に寄与する論文を掲載し、また国史学会の活動を報告し続けていくこととなる。國學院大學の史学研究者・学生にとって、『国史学』の発刊は大きな意義があつたと言えよう。

## 二 戦前―戦後の国史学会

### ①戦前の主な活動

学会の主要活動の一つとして、研究報告の場である例会・大会等の開催が上げられる。当然国史学会においても開催しており、盛んに研究の報告が行われている。昭和四年度の例会・大会は次のような内容であつた。

#### 【史料④】<sup>(24)</sup>

第一回例会（五月七日午後六時より）

一、八幡宮異聞

村田正志君

一、開国論及攘夷論について

評議員 井野辺茂雄君

## 第二回例会（六月十五日午後二時半より）

一、国衙領の知行について

松本勝三君

一、タブーと祭祀

評議員 植木直一郎君

## 第三回例会（十月八日午後六時より）

一、室町時代に於ける土倉

奥野高広君

一、砂糖と江戸文化との関係

評議員 澤田章君

## 第四回例会（十一月二十六日午後五時半より）

一、維新の際に於ける高野山の紛騒一件 藤井貞文氏

一、親玄僧正と其の日記に就いて 評議員 岩橋小弥太氏

## 大会（十二月七日午後一時半より）

一、大神宮の本地仏の変遷を論じて本地垂迹説に及ぶ

評議員 文学博士 山本信哉氏

一、道元と時頼 参助員 文学博士 辻善之助氏

## 第五回例会（一月二十八日（火）午後六時より）

一、伊勢平氏の勃興 学生 久保寺久夫氏

一、真宗の神祇に対する態度 学生 国枝正雄氏

一、近世神社研究の発達 評議員 河野省三氏

学生・教員・会員を問わず、様々な立場の者が研究報告を行っていることがわかる。以降、一年度に五―八回程度例会を開催し、様々な者が多分野に渡る報告を行い、その活動を益々盛んにしていった。しかしこの活動は、昭和十九年頃まで活発に行われてきたが、戦争の激化により縮小を余儀なくされたようで、昭和十九年十一月の『国史学』第四十九・五十合併号に例会報告は確認出来ない。<sup>(26)</sup>

国史学会では、送別会や懇親会、新入会員歓迎会も行われた。送別会・懇親会については、主に学生幹事として学会に寄与してきた者たちや、学生会員の卒業に際し催されている。<sup>(26)</sup> 他方新入会員歓迎会は、「(前略)次に岩橋当番評議員より本会の沿革並にその事業に関して説明し、更に歴史研究の方法態度等に就ての詳細なる注意あり、尋で井野辺、沢田、植木、高柳各評議員より本会に関する説明や史学研究に就ての重要な注意を懇示せられ」とある<sup>(27)</sup>ように、大学に入学してきたばかりの会員への研究姿勢の注意や、激励の意を込めて行われていた。【史料①】にもある通り、戦前の会則では学生も会員に含められており、国史学会が学生への教諭・指導の場としての役割を持っていたことが窺える。指導という面については、学生への講習会・研究会・見学旅行・第二部例会等の活動も盛んに行われたが、次章にて触れる為ここでは省略する。

また学会では、史料展覧会・史料の出版も行った。例えば、昭和六年に久我侯爵家から家伝文書を國學院大學図書館に寄託された際、学会で整理をすることとなった。<sup>(28)</sup> この久我家文書は、昭和六年十月二十四日の国史学会大会<sup>(29)</sup>、同年五月二十五日の春季大会において展覧会を同時開催する他、同十三年十月三十・三十一日には明治戊辰七十年を記念し、国史学会の秋季大会と合せて久我・高倉両家文書の公開展覧会が行われている。<sup>(31)</sup> 昭和十年には『久我家文書摘英』と題した図録集を刊行している他、終戦後、大学の所蔵するところとなり、学術研究に利用された。<sup>(33)</sup> 史料展覧会の事例はこの他にも、昭和十四年十一月十二・十三日に秋季大会に合わせて八坂神社文書の展覧が催される等、<sup>(34)</sup>

盛んに行われている。以上が、戦前における国史学会の主な活動であった。

## ②戦時下の国史学会

前述のような活動を行っていく一方、当該期の戦争の余波を蒙り始め、『国史学』にも会員の応召等の記事が見えるようになっていく。管見の限り同誌中で最初に見える戦争関連の記事は、昭和十三年九月十日に委員の齋木一馬（後大正大学名誉教授）が応召され、郷里の歩兵連隊に入営されたというもので、加えてそこには「前幹事鈴木秋夫君は砲兵少尉として北支に転戦せられて居り、会員諸君のうちに於ても応召せられた方も多しと思はれる」等々と、国史学会にも既に戦争による影響があった事が分かる。その後も昭和十五年の『国史学』四〇号には「本会々員中今次事変に応召して軍務に精励してゐる者尠くない。（中略）鈴木秋夫君は一昨年春応召出征せられ、目下中尉として北京に在勤、齋木一馬君は同じく一昨年秋応召、内地勤務として鯖江聯隊にあり、近藤喜博君も同じ頃応召、目下中支戦線に活躍中、小泉祐次君は昨年冬、応召同じく目下中支にあつて軍務に励まれてゐる」とあり、以後も多くの会員が出征した。<sup>(37)</sup>特に先述の齋木は一度帰還したが、再度出征している。<sup>(38)</sup>出征した中には戦死した会員もあり、<sup>(40)</sup>当時の悲嘆は計り知れない。国史学会の会員にも、戦争の激化によって極めて大きな影響があった。

このような中で、『国史学』の刊行にも支障が開始される。東京大学史料編纂所助教授・東京造形大学教授で、國學院大学講師であった奥野高広は、戦時下の『国史学』刊行について次のように回想している。

### 【史料⑤】<sup>(41)</sup>

私は昭和十七年五月から十九年まで岩橋・高橋両評議員の下に主務委員を勤めることになった。その十月に四十

五号を発行しえたが、戦争の重圧は漸く厳しく、印刷費の昂騰にかかわらず、すでに日本出版文化協会の会員として、停止価格の定価を守らねばならなかった。十八年四月、四十六号を発行してのちの見通しは全く立たない。若手委員は続々応召し、前幹事諸君から出征に先立ち寄附金をよせられたのは、今も感謝に堪えない。印刷費は昂騰の一途をたどり、しかも印刷所が統合されたため、少数数の雑誌を引受けるところを捜すのは困難であった。戦局の前途は、素人目にもただごとではない様相を濃くしてきた。「総動員体制」はますます強化されたが、十八年七月の例会で岩橋評議員は、「決戦下国史学の研鑽に従う者の心構えについて」話し、一部に見られるような邪道に陥ることなく、正統の道を護持して学術報国の誠を捧ぐべきであると強調した。歴代天皇の日記だけでなく日本の歴史は書けないかというような大日本言論報国会の考えとか、天皇には「私」の生活はないという軍部の想定や、文部省の「国体の本義」発行など一連の国策に附和雷同した人々に一矢を報いたのが岩橋評議員であった。「国史学」にこの類の論文が掲載されなかったのは、幸といふべきである。

戦時中、若手委員の応召に加え、印刷費高騰や印刷所の統合により学会運営や機関誌の刊行に多大な支障があったことが確認出来る。その中で岩橋の訓辞は、国史学会にとって大きな意義があった。

しかし、戦局の悪化はその後『国史学』刊行に影響を与えた。昭和十九年二月には高柳光寿評議員（東京帝国大学史料編纂官・國學院大學教授）の高配で三教書院から四十七・八合併号を出す事が出来た。だがその三教書院も統合の対象となったため、岩橋・高橋隆三（東京帝国大学史料編纂官）の両評議員は次号を最後の刊行と見切り、四十九・五十合併号の刊行を指示し、その費用を岩橋の斡旋で青磁社の寄附で賄った。その準備中、『国史学』は『國學院雜誌』との統合を日本出版会から命じられたが、主務委員であった奥野高広は自分の責任でこれを無視し刊行した

ため、日本出版会から出頭命令が来た。この件は不問に附せられたが、結局戦争末期は『国史学』は停刊、学会運営もまた停止を余儀なくされ、その復活は戦後を待つ事となる。<sup>(42)</sup>

### ③戦後の活動再開

戦後、昭和二十二年五月十日に旧評議員十一氏が再建のための評議員会を開いた。この議決ではまず会則の改正が行われ、通常会員・賛助員の二本立てを改め、賛助員を廃止して会員制一本とし、新会員には「学生」を含める文字を削除して評議員・委員の選出方法等に若干の改正を行った。そして渡辺世祐博士が会長となり、評議員には國學院大学教員を中心に十三名が就任した。<sup>(43)</sup>

再建後初の例会は、評議員会の一週間後、五月十七日に開かれた。報告は斎木一馬「近世初頭に於ける一官人子弟の家庭教育に就いて」であった。<sup>(44)</sup>以後例会は順当に開催されており、昭和二十四年の『国史学』復刊以降は例会記事も掲載され、その報告内容が紹介されている。

『国史学』復刊の議論は以前よりあったものの、経済的な面が問題となった。昭和二十三年六月に委員会が会員に対して近況報告を兼ねて送った要望書には、委員会は『国史学』の復刊を念頭に置きつつも、未だ経済的事情が許さぬため、具体化しえない有様である事が記されている。<sup>(45)</sup>しかし、評議員会や委員会が熱心に協議され、また学会の赴勢に対応し、地方会員からの要望もあり、その気運は高まっていた。引続き用紙の入手や印刷所の確保の壁があったが、横浜刑務所に印刷を頼み、昭和二十四年十月に『国史学』第五十一号が刊行され、ここに『国史学』は復刊した。<sup>(46)</sup>掲載論文は藤井貞文「日米通商条約の調印に関する一考察」、岩沢愿彦「刀禰の先駆的一形態」、山本武夫「近世古注学の復興―折衷学の本質―」、佐野大和「金沢町に於ける砂洲の発達と遺蹟の分布」であり、他に書評や史料紹介も

掲載された。同号巻末の学会記事には、例会や見学会等、国史学会再建以降の活発な活動を報告すると共に、次のように記されている。

【史料⑥】<sup>(47)</sup>

学会活動は、それが各委員の学究に対して常に新鮮な力を湧き滾らせるところに一つの意義を持つものと思ふが、この意味に於いて吾々は国史学会を以て各自学究の一基底となるが如く育成すべきであり、そこに又新しい幾多の構想が創出されねばならないと思ふ。国史学会はまだく新しい活動の分野を残してゐる。その開拓こそ各会員の手にとされた任務であり、同時に国史学会のもつ大きな未来でもあらう。

学会活動に対する展望を示し、学会としての決意を新たにしている。機関誌の復刊は、国史学会にとって大きな意義のあることであつたと言えよう。とはいへ、『国史学』の刊行には以降も問題がつきまとつた。國學院大學名譽教授であつた林陸朗は、当時の印刷所の事情や粗悪な印刷用紙の割当配給、進駐軍の出版物検閲等について回顧している。<sup>(48)</sup>しかし昭和二十五年には文部省の学術誌刊行補助金を受けることとなり、『国史学』の年二回の発行が可能となつた。<sup>(49)</sup>

以降、国史学会は昭和二十五年十月に戦後第一回の大会を開催する等<sup>(50)</sup>順調に活動を重ね、昭和三十四年には創立五十周年を迎えた。同年十一月二十八日・二十九日、昭和三十四年度大会を兼ねて、創立五十周年記念大会が開催され、二十八日には、岩橋小弥太「紫式部の史学思想」、高柳光寿「日本史に於ける属人主義と属地主義」の記念講演があり、二十九日には内藤康夫「功田をめぐる一、二の問題」他八氏の研究発表が行われた。<sup>(51)</sup>戦後、様々な問題を

抱えつつも国史学会は再建されていき、徐々にその活動を活発化させていったことがわかる。

### 三 学生への教育と国史学会

#### ① 戦前

二章で確認したように、戦前の国史学会では例会・大会の開催や史料の展覧会等が行われていたが、それ以外にも学生への指導を目的とした活動が行われていた。そこでは、学生指導に関わる具体的な事例を見ていきたい。

一つ目は講習会である。昭和七年から史籍講習会が開催されており、『国史学』十二号の学会記事には五月十一日より毎週水曜午後五時から、国史研究室において高柳光寿の指導による「大乘院寺社雑事記」の講読を行っている事が記されている。<sup>(52)</sup>高柳による同史料の講読は昭和十年まで続き、<sup>(53)</sup>昭和十一年からは講師が奥野高広に代わり、「看聞御記」をテキストに毎週月曜に行われ、<sup>(54)</sup>翌年にはこれに加えて「室町時代史籍解題」の講義も行われた。<sup>(55)</sup>さらに同十三年には講師が斎木一馬と村田正言の二人となり、それぞれ「御湯殿上日記」と「玉葉」を毎週火曜交互に行う等、<sup>(56)</sup>講習分野の充実化が図られている。

また、同十年からは古文書講習会も行われた。初年は岩橋小弥太によって「久我家文書」の演習を毎週火曜に行い、<sup>(57)</sup>以降昭和十一年は曜日を金曜に移し、村田正志を講師に引続き「久我家文書」を教材とし、<sup>(58)</sup>翌十二年からは高橋隆三を講師に「古文書の実際の運用を主題として」講義が行われている。<sup>(59)</sup>

そして、昭和十年からは次の史料に見られるような第二部例会が行われた。

【史料⑦】<sup>60)</sup>

本学会では毎月の例会及び毎週の古文書演習（岩橋教授指導）、記録演習（高柳教授指導）の外に、更に多数学生会員の希望に依り、将来国史教育の實際に携らむとする学生諸君に、卒業後直ちに役立つべきものを与へたいという考から、昨年第二学期以来国史教育の理論、方法、演習、平易なる史籍解題等に就て自由な質疑応答を兼ねた座談的な例会を毎週催し、多数会員出席して頗る好成績を収めてゐる。昨年末迄の成績は左の如くである。

第一講 十月一日（火）

「中学国史教育に就いて」 村田正言君

第二講 十月九日（水）

「多聞院日記に就いて」 永島福太郎君

第三講 十月十六日（水）

「御湯殿の上の日記解説」 齋木一馬君

第四講 十月三十日（水）

「記録上よりみたる平安貴族出産風俗に就いて」 吉田常吉君

第五講 十二月五日（木）

「国史教授法の實際」第一回 村田正言君

演習として「院政」（高柳教授著中等国史教科書）を取扱ふ。

## 第六講 十二月一日（水）

「国史教授法の実際」第二回

村田正言君

演習として「弘安之役」・「近世初期文学」（上記教科書）を取扱ふ。

かうした催が学部・高師部・神道部・予科を通じて学生間に意外の好評を博し、頗る有意義に続行されつゝ、ある事は喜ばしい事である。

学生会員からの希望で、学生に対し、国史教育の理論や方法、演習、史籍解題等をテーマとして指導する例会を催していたことがわかる。実際に行われた例会の内容を見るに、そのテーマは多岐に亘っており、学生の知識の裾野を広げる狙いがあったのだろう。この第二部例会は学生にも好評を博し、翌年には藤井貞文・村田正言を講師として、「日本開化小史」をテキストとし、他に史学概論、学界の動向等史学研究の実際的問題について、座談的形式の下に討議する形で開催され、<sup>(61)</sup>同十三年にも藤井が講師で史学研究法に関する指導を行った。<sup>(62)</sup>この例会が、学生の知識形成に大いに資するものであったことは間違いない。しかし、これら史籍講習会・古文書講習会・第二部例会に関する記事は、昭和十四年を最後に『国史学』の学会記事からは見えなくなるため、<sup>(63)</sup>その後戦時中に行われたかは定かではない。

戦前の国史学会で忘れてはいけないのが、見学旅行等の実地見学調査である。一章の冒頭でも指摘したように、明治四十二年の国史学会発足当時の会則第三条に史蹟の実地調査に関わる記述があり、既に構想はあったが、それが実現するには少々時を待たねばならなかった。

実地見学という点では、大正四年五月八・九日にも研究旅行が行われている。<sup>(64)</sup>この研究旅行は、「机上の空論野外

の徒訪は、これ吾人の大に鑑みるべきところ、時恰も臨地研究によし、即ち公開講演会に代ふるに研究旅行を以てせむとて五月八日九日を其の日と定めぬ<sup>(65)</sup>と、公開講演会に替えて行われた。八日には山本信哉他四人の講演会が大国魂神社社務所にて行われる一方、二日間で府中国分寺、大国魂神社、方安寺、善明寺、妙光院、百草八幡宮等を訪れ、国分寺では堂塔配置の状態を残存する礎石について説明を受け、妙光院では宝物文書を閲覧するといった事もしている<sup>(66)</sup>。明確に史蹟踏査会として催されたものではなかったが、臨地研究を目的として実際に様々な旧跡を訪れ、所蔵文書や仏像等を拝観しており、後に続く見学旅行等の先例として位置づけられるだろう。

本格的な見学旅行の始まりは、大正五年十月一日に行われた国府台方面の史蹟踏査会である。初回の実施については、『國學院雜誌』に次のように記されている。

【史料⑧】<sup>(67)</sup>

国史学会に於ては、会則第三条「本会の目的を達する為め、一、三、九月の三期に研究懇話会を開き、五、十一月の二期に於て講演会（公開）を催す、但し史蹟の实地踏査を以て研究会に充つる事あるべし」と条により事業を実行し来りしが、這般社会の要望に鑑み、会則以外に十、二、四月の三回臨時研究会を開き、亦別に毎月今迄一部会員有志の実行し来れる関東史蹟踏査研究会を大正五年九月より会の事業として決行することに定め、其第一回として催したるは十月一日（九月廿四日挙行の処雨天延期）の国府台方面史蹟踏査なりき。当日午前八時押上京成電車終点出発、万葉集により名高き真間入江を始め、国府台城趾、古墳及び総寧寺文書等を研究し、国分寺に旧趾、古瓦を調査見学したり、亦下貝塚に於ては石器骨器貝器土器の珍品を採集して八幡町八幡社の古鏡を調査の午後四時帰京せり。

元々九月中に予定の処、雨天のため十月に延期した同調査であるが、当日は国府台城址や古墳・総寧寺・国分寺・八幡社等を訪れ、旧跡を見学する他、古文書や古瓦・古鏡等を拝見し、貝塚で石器や土器を採集する等、普段の授業では得られない経験が出来たことがわかる。以後同年十一月には早くも第二回史蹟踏査会を調布深大寺方面に行っている他、大正六年二月には須和田六所神社・国分寺・柴又帝釈天等の古文書や縁起等を調査する等、様々な場所へと赴いている。以降この活動もしばらくは活発に続いたが、大正十一年十月の有馬伯爵家文書・向島牛島神社・三囲神社史料の実地見学を最後に、『國學院雜誌』より見えなくなる。

しかし『国史学』の発刊以降、見学旅行等が盛んに記されるようになる。『国史学』第一号には昭和四年四月二十八・二十九日に行われた鎌倉見学旅行について記される。その記述を確認すると、岩橋・高柳両評議員及び会員の永峰光寿の指導の下、会員十九名が参加し、初日に鶴岡八幡宮・円覚寺・明月院・建長寺等を訪れ、鶴岡八幡宮所蔵の社務日記、古図、寄進状、願文其他の古文書、宝物類を拝見した事、二日目に頼朝や大江広元の墓を詣で、瑞泉寺を見学、荏柄天神社所蔵の宝物を見学し、それから大仏や長谷観音に詣でつつ江ノ島に向かい、各宮や御岩屋に参拝、見学した事等が記されている。以降も同五年五月二十五日は金沢称名寺及び鎌倉、同七年五月二十九日は茨城県結城、昭和八年五月二十一日は川越等、様々な土地に赴いて、実地見学を行っている。また昭和十一年十月には十三・十四日の二日掛けて伊豆へ、同十二年には二十一日から二十三日までの二泊三日で平泉・塩釜・仙台地方を巡る等、遠方で数日を掛けて見学を行うことも増えた。加えて、日帰りの指導会や見学会も行われており、昭和十二年五月十七日には東京帝国大学史料編纂所の展覧会を見学し、翌十三年十月九日は浅草神社における探訪現地指導会が催され、更に同十四年には宝生寺や弘明寺等横浜市内の史料探訪が行われる等、実地教育活動の活発さが窺われる。更には、当時の実地見学について、國學院大學教授であった小川信は次のように述懐している。

【史料⑨】<sup>(80)</sup>

第一、入会の動機は始めから国史専攻を目指していた為であるが、実は白状するともう一つの理由があった。というのは、六月初旬の好シーズンに恒例の見学旅行があるので、三・四日も公然と授業を休んでそれに参加できるのが大きな魅力であったのだ。入会した年は大場先生や当時維新史料編纂官の藤井先生の指導による、加賀越前方面の史蹟巡覧であったが、実際この旅行は聞きしにまさる楽しさだった。先づ出発の数日前に説明会があって、未知の土地についてあれこれと想像に胸を躍らせる。愈現地に赴くと先生や先輩諸氏の詳しい解説付きで、次々と史蹟を廻り、史料を採訪する。(中略) 始めの年は新入りの私などは一応片隅に小さくなっていたものの、やはりこの北陸旅行が病付きとなつて、翌十四年は奈良・吉野方面、十五年は北信地方、十六年は平泉松島と、連年の春季旅行に欠かさず参加した。その上、いつも現地解散が建前であったから、ついでの事に気の合った連中と二三人で、学校を更に一日二日サボつて、旅程を延長したものであった。また毎年秋には近郊へ一泊の小旅行が行われ、これにも必ず出掛けていった。

実地見学は、当時の学生にとつても一大イベントであったようである。ここでの経験は得がたいものであったことであろう。見学旅行は、『国史学』において講習会や第二部例会よりも長い間掲載されていたが、それでも戦争の影響か、昭和十九年五月に行われた川越研究旅行を最後に確認出来なくなる。<sup>(81)</sup>

以上に挙げた講習会・第二部例会・見学旅行等の諸活動は、学会の国史教育を重要視する姿勢が表れており、これらの活動が戦前の國學院史学に在籍する学生の能力向上に多大なる影響を与えたのは間違いないだろう。

## ②戦後

前述のように、戦前の国史学会では学生への教育活動が盛んに行われていたが、終戦を経て再建された国史学会においては、これらの活動は行われなくなった。と言うのも、戦後学友会の再建が議せられ、昭和二十一年度からは学友会の學術部会の一つとして新たに國學院大學史学会が発足することとなったからである。この会は、國學院大學在學生を会員として、教授を会長・顧問等に推して運営される學生主体の会である。従来の国史学会は、學生・卒業生・学外有志者を含み、学内的には学友会に属し、学外的には學術団体として存在していたが、戦後になり學生を主体とする学友会所属部会として史学会が独立し、国史学会は学内団体的な性格を払拭するに至った。<sup>(82)</sup>

では、独立当時の史学会の活動は如何様なものであったかというと、実は『国史学』にその活動がしばらくの間掲載されていた。昭和二十四年度の史学会の活動であるが、大まかに分けて例会、定例研究会、研究討論会、見学調査、公開講演会・批判会が行われている。例会は史学第一研究室にて行われ、次の報告が行われた。

【史料⑩】<sup>(83)</sup>

「古墳群に於ける二三の問題」(六月) 永峰光一君

「弥生式に於ける大陸系文化の一面」(六月) 亀井正道君

「東大寺領初期庄園に関する一考察」(九月) 林陸朗助手

「法度に表はれたる戦国大名の農民政策」(十月) 横山春夫君

「女人往生論の一視点―その展開と史的意義―」(十一月) 菊地武君

「鎌倉時代に於ける肥後国人吉庄と相良氏」(十二月) 池永二郎君

「鎌倉時代に於ける人吉庄の内部構造に関する若干の考察」(一月) 田村堯君

「江戸文芸の社会的階級的基盤」(二月) 滝川義一君

「卒業論文発表」(二月) 安川忠正外六君

古代から近世にかけての幅広い分野に掛かる報告が行われたことがわかる。また、卒業論文の発表の場でもあった。定例研究会は、岩橋教授指導「続日本紀輪読会」(毎週月曜)、村田講師指導「古文書研究会」(毎週火曜)、斎木講師指導「吾妻鏡輪読会」(毎週金曜)が行われており、内容から恐らく戦前までの諸講習会に相当すると思われる。研究討論会については、「日本史の諸問題の視点とその構想」と題し、十二月三日から翌年二月二十五日まで毎週土曜日に行った。これは「各時代を通じて、問題の所在を明かにし、時代の流れと共に、各問題の把握を目的としたもの」であり、この回は主として社会経済史に限るが、次回からは文化史思想史の方面について行う予定であったも記されている。研究会の回数は十回にも及び、助手小出義治による「原始社会の諸問題」、同じく当時助手であった林陸朗「古代国家の性格」から、学生の池水二郎による「元弘建武の内乱」、南和男・山本慎吾「都市経済と農村経済」、長光徳和「日本軍国主義とファシズム」等、古代から近代までの諸報告が行われている。<sup>(85)</sup> テーマを決めた討議という側面は、戦前行われていた第二部例会に近い要素と言える。

この他見学会として、国立博物館の法隆寺展や正倉院展の見学、鎌倉円覚寺・瑞泉寺への見学や浄光明寺の古文書探訪、根津美術館・東大史料編纂所史料展等への見学が行われたが、この指導として大場磐雄・岩橋小弥太・藤井貞文・村田正志・斎木一馬・奥野高広・林陸朗・小出義治ら教授・講師・助手の他、史料編纂官であった玉村竹二も参加している。<sup>(86)</sup> 戦前の国史学会で行われた見学旅行の流れを汲むものであると言えよう。

公開講演会は十一月に松本新八郎「中世農民生活の諸様相」の報告があり、その批判会も同月に行われた。また翌年二月には、笠原一男著「日本に於ける農民戦争」其他同氏論文合評会も行われている。<sup>(87)</sup> これら公開講演会・批判会については、「聴き放し、読み放しを否定し、充分な研究と思索の上に立つて批判する必要性を痛感して行つたものである」とあり、<sup>(88)</sup> 研究能力の向上を目指して行われたものであった事が分かる。

この他にも史学会は、会報『史友』を発売して学生の研究発表・学内ニュース・学会動向を掲載する他、有志グループによって近世史の研究会（徳川禁令考）や、「小右記」・<sup>(89)</sup>「大乘院寺社雑事記」・「町人囊」等記録の講読、久我家文書の解説・整理・編纂及び文献目録の製作等も行っており、活発な活動が行われていた事が確認出来る。これらの活動は、終戦以前に国史学会で行われていた活動の流れを汲むものが多く、戦後、国史学会が担っていた教育活動が史学会へ移行されたことが指摘できる。

『国史学』へは昭和三十一年まで史学会の現況が掲載されているが、<sup>(90)</sup> その間も様々な研究会、発表会、見学会等が行われており、史学会の活動が戦後、学生の教育に資するところがあつたのは間違いない。

## おわりに

本稿では、國學院大學における戦前・戦後の学会活動を探る上で国史学会に焦点を当て、その活動の変遷と学生教育について分析を試みた。

明治四十二年に発足した国史学会は、学内外の学会・研究会の中でも早期に活動を開始し、活発な研究発表が行われたが、大正末期には活動が停滞気味となっていた。但し、同時期より学生教育の地盤は固められていた。昭和に入

り、会則の改正や会務の拡張が行われ、さらに同四年に『国史学』が発刊されたことで国史学会の活動は本格化した。これらの活動や変革のきっかけは学生であり、彼らのエネルギーが原動力となっていた。

戦前の主な活動は例会・大会等の研究報告、史料整理による史料展覧会や史料の出版、学生への講習会・研究会・見学旅行といった諸指導が挙げられる。また折々で送別会や懇親会、新入会員歓迎会も行われた。しかし戦争が始まると、その余波を受け会員の応召が続々と始まり、戦死者も出た。さらに『国史学』の刊行にも影響が及び、最終的に『国史学』は停刊、学会運営も停止となった。一方で評議員であった岩橋小弥太が例会で「一部に見られるような邪道に陥ることなく、正統の道を護持して学術報国の誠を捧ぐべき」と提示したことは、国史学会の活動指針として大きな意義があった。戦後の学会再建は会則の改正から始まり、例会も再開され、昭和二十四年には『国史学』が復刊、同三十四年に創立五十周年を迎え、記念大会が催された。様々な問題を抱えつつも国史学会は再建されていき、徐々にその活動を活性化させていったことがわかる。

また、学生への教育・指導は戦前の国史学会の重要な役割の一つであった。講習会・第二部例会・見学旅行等の活動が盛んに行われ、学生教育を重要視していたことが窺える。これらの活動は、戦時下のあおりを受け停止してしまったが、戦後、国史学会から独立・発足した史学会において、例会・定例研究会・研究討論会・見学調査・公開講演会・批判会等が行われ、国史学会が担っていた教育活動機能が史学会に移行された。このような活動が、國學院大學の史学学生の知識形成に資するものであったことは間違いない。

以上、国史学会の活動は長きにわたって活発に行われ、特に戦前には大学内における学生への指導組織でもあったことが確認出来た。この活動は、普段の授業と相まって、学生の研究能力を伸ばす上で重要な役割を果たし、戦後その機能が史学会に受け継がれている事は大きな意義があると言えよう。

一方、本稿では確認出来なかった部分も多く残る。例えば、この後の国史学会の活動や史学会のその後の活動について、国史学会は活動が低迷し、『国史学』の発行も一旦は途絶えてしまうが、再建が図られることとなる。<sup>(91)</sup> その後については、会報『史友』が刊行されているので確認が可能である。また、戦前の国史研究室では国史学会とは別の研究会が行われており、戦後も史学研究室における研究会が行われる等、<sup>(92)</sup> 学会外での活動も活発であった。学生への指導を確認する上で、これらの活動も加味する必要があるだろう。加えて、戦前の他学会の活動についても確認しなければならない。国史学会はあくまで史学の学生・研究者に関わる組織であり、國學院大學の歴史を鑑みる上で、他分野の活動についても分析をする必要がある。戦前活動していた学会は国文学会の他、現在は中国学会と名称を変えた漢文学会、今は無き道義学会等があり、このような情報を蓄積することにより、戦前・戦後の國學院大學における学会活動の実態と変遷を、より明らかにする事が可能となる。これらについては、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 『國學院大學百年史 上』國學院大學 平成六年 五〇一頁
- (2) 國學院大學中国学会ホームページ (<https://www.kokugakuin.ac.jp/education/rd/letters/doc/about/p2>)
- (3) 前掲1 『國學院大學百年史 上』四五七頁
- (4) 前掲1 『國學院大學百年史 上』四五七―四五八頁
- (5) 前掲1 『國學院大學百年史 上』四五八頁
- (6) 『國學院雜誌』一六一―明治四十三年 一〇一―一〇二頁
- (7) 『國學院雜誌』一六一―明治四十三年 八九頁。なお講演は池辺吉太郎「西南の役に関する記憶」、塚原波柿園「江戸時代の

文教」。

- (8) 『國學院雜誌』一七―一六 明治四十四年 一〇四―一〇五頁。講演内容は、渡辺世祐(文学士)「関ヶ原役に於ける上杉氏の態度」、衆議院議員島田三郎「三雄の海外政略」。
- (9) 『國學院雜誌』二二―一〇 大正四年 一〇一―一〇二頁
- (10) 『國學院雜誌』一七―一〇 明治四十四年 九五―九六頁
- (11) 『國學院雜誌』一八―二(明治四十五年) 八六―八七頁、同二〇―二(大正三年) 九二―九三頁、同二二―二(大正四年) 一一―二頁、同二三―五(大正六年) 八〇頁、他。
- (12) 『國學院雜誌』一八―二 明治四十五年 八六―八七頁
- (13) 「七十年の回顧」(『国史学』一・一〇・一一―一 昭和五十五年) 一三五頁
- (14) 『國學院雜誌』一七―一六 明治四十四年 一〇三頁
- (15) 前掲1参照。
- (16) 前掲1 『國學院大學百年史 上』 六五九頁
- (17) 前掲1 『國學院大學百年史 上』 六五九頁
- (18) 前掲13 「七十年の回顧」 一三四頁
- (19) 「雑誌の発刊に就いて」(『国史学』一 昭和四年) 七一頁
- (20) 「学会の改革に就いて」(『国史学』一 昭和四年) 七一頁
- (21) 岩橋小弥太「葉間堂老翁自伝」(『国史学』八〇 昭和五十四年) 四一六―四一七頁
- (22) 「会費に就いて」(『国史学』一 昭和四年) 七一頁

- (23) 「会費の収納について」〔『国史学』五 昭和五年〕五八頁、他。
- (24) 『国史学』一（昭和四年）七二頁・『国史学』二（昭和五年）五七―五八頁より抜粋。
- (25) 『国史学』四九・五〇 昭和十九年
- (26) 「送別会」〔『国史学』一一 昭和七年〕六二頁、他多数。
- (27) 「新入会員歓迎会」〔『国史学』一一 昭和七年〕六二頁
- (28) 詳細については、拙稿「岩橋小弥太と國學院大学―その教育と古文書学」〔『國學院大学 校史・学術資産研究』一二 令和二年）一八六―一八九頁を参照頂きたい。
- (29) 「久我侯爵家文書展覧会の開催」〔『国史学』九 昭和六年〕七三頁
- (30) 「第二回久我家文書展覧会」〔『国史学』二四 昭和十年〕七六頁
- (31) 「久我・高倉両家文書公開展覧会」〔『国史学』三四 昭和十三年〕七五―七六頁
- (32) 「久我家文書摘英 第一輯」国史学会 昭和十年
- (33) 詳細は前掲拙稿28「岩橋小弥太と國學院大学―その教育と古文書学」一八六―一八九頁
- (34) 「八坂神社文書展覧会」〔『国史学』三七 昭和十四年〕五〇頁
- (35) 「齋木委員の応召」〔『国史学』三六 昭和十三年〕六三頁
- (36) 「戦線委員の消息」〔『国史学』四〇 昭和十五年〕四七頁
- (37) 「小田委員の応召」〔『国史学』四三 昭和十六年〕四六頁、「寄付金」〔『国史学』四七・四八 昭和十九年、本項で前幹事杉山博ら三名の出征についても触れられる〕一二七頁、「齋木・高階・若月三君の応召」〔『国史学』四九・五〇 昭和十九年〕六八頁、他。
- (38) 「前委員齋木一馬君の帰還」〔『国史学』四六 昭和十八年〕五六頁

- (39) 前掲37「齋木・高階・若月三君の応召」六八頁
- (40) 「会員池田富士彦君の戦死」〔『国史学』四二 昭和十六年〕五二頁、「村田正言君の戦死」〔『国史学』四九・五〇 昭和十九年〕六八―六九頁
- (41) 「国史学会五十年略史」〔国史学会編『五十年の回顧』昭和三十五年〕一〇頁
- (42) 戦中期の学会運営・『国史学』刊行に關しては、前掲41「国史学会五十年略史」一〇―一一頁、前掲13「七十年の回顧」一三六―一三七頁の他、前掲拙稿28「岩橋小弥太と國學院大学―その教育と古文書学」一八一―一八二頁を参照いただきたい。
- (43) 前掲41「国史学会五十年略史」一二頁、前掲13「七十年の回顧」一三七頁
- (44) 前掲41「国史学会五十年略史」一一―一二頁
- (45) 前掲41「国史学会五十年略史」一二頁
- (46) 前掲41「国史学会五十年略史」一三頁
- (47) 「学会記事」〔『国史学』五一 昭和二十四年〕七三頁
- (48) 前掲41「国史学会五十年略史」一三頁
- (49) 前掲13「七十年の回顧」一三八頁
- (50) 前掲41「国史学会五十年略史」一三頁、「国史学会大会」〔『国史学』五四 昭和二十六年〕九六―九七頁
- (51) 「創立五十周年記念大会記事」〔『国史学』七二・七三 昭和三十五年〕二〇五―二〇六頁
- (52) 「史籍講習会」〔『国史学』一二 昭和七年〕六四頁
- (53) 「史籍講読会」〔『国史学』二四 昭和十年〕七五頁
- (54) 「史籍講読会」〔『国史学』二七 昭和十一年〕八二―八三頁

- (55) 「史籍講読会」(『国史学』三一 昭和十二年) 八五頁
- (56) 「史籍講読会」(『国史学』三五 昭和十三年) 六一頁
- (57) 「古文書講習会」(『国史学』二四 昭和十年) 七五頁
- (58) 「古文書講習会」(『国史学』二七 昭和十一年) 八二頁
- (59) 「古文書講習会」(『国史学』三一 昭和十二年) 八五頁。なお翌年も高橋を講師として行われた(『古文書講習会』『国史学』三五 昭和十三年 六一頁)。
- (60) 「第二部例会」(『国史学』二六 昭和十一年) 八九―九〇頁
- (61) 「第二部例会」(『国史学』三一 昭和十二年) 八五頁
- (62) 「第二部例会」(『国史学』三五 昭和十三年) 六一頁
- (63) 「史籍講読会」(『第二部例会』(『国史学』三八 昭和十四年) 六二―六三頁。なお、当該年度の史籍講読会は奥野高広による「看聞御記」、古文書講習会は第二部例会と兼ね村田正志の「宸翰謹読会」が行われている。
- (64) 「國學院雜誌」二二―五 大正四年 一〇三―一〇四頁
- (65) 前掲64 「國學院雜誌」二二―五 一〇三頁
- (66) 前掲64 「國學院雜誌」二二―五 一〇四頁
- (67) 「國學院雜誌」二二―一〇 大正五年 八八頁
- (68) 「國學院雜誌」二二―一一 大正五年 八二頁
- (69) 「國學院雜誌」二三―一三 大正六年 八三頁
- (70) 「國學院雜誌」二八―一二 大正十一年 八九頁

- (71) 「鎌倉見学旅行」(『国史学』一 昭和四年) 七二頁
- (72) 「見学旅行」(『国史学』四 昭和五年) 七二頁
- (73) 「茨城県結城地方見学旅行予告」(『国史学』一一 昭和七年) 六六頁、「見学旅行」(『国史学』一二 昭和七年) 六四―六五頁
- (74) 「見学旅行」(『国史学』一六 昭和八年) 七六―八一頁
- (75) 「西伊豆地方研究旅行及び沼津公開講演会」(『国史学』二八 昭和十一年) 八六―八八頁
- (76) 「平泉塩釜仙台地方研究旅行」(『国史学』三一 昭和十二年) 八六―八七頁
- (77) 「東大史料編纂所展覧会見学」(『国史学』三一 昭和十二年) 八五―八六頁
- (78) 「史料探訪現地指導会(浅草神社)」(『国史学』三六 昭和十三年) 六二頁
- (79) 「横浜市内史料探訪」(『国史学』三七 昭和十四年) 五一―五二頁
- (80) 小川信「昭和十五、六年頃の国史学会」(国史学会編『五十年の回顧』昭和三十四年) 六八頁
- (81) 「研究旅行」(『国史学』四七・四八 昭和十九年) 一二六頁
- (82) 史学会の成立や戦後の国史学会の再出発については、前掲41「国史学会五十年略史」一一頁を参照。
- (83) 「國學院大学史学会の動向」(『国史学』五一 昭和二十五年) 七〇頁
- (84) 前掲83「國學院大学史学会の動向」七〇頁
- (85) 前掲83「國學院大学史学会の動向」七一頁
- (86) 前掲83「國學院大学史学会の動向」七一頁
- (87) 前掲83「國學院大学史学会の動向」七一頁
- (88) 前掲83「國學院大学史学会の動向」七一―七二頁

- (89) 前掲83「國學院大学史学会の動向」七二頁
- (90) 「國學院大学史学会の現況」(『国史学』六七 昭和三十一年) 六一頁
- (91) 詳細は前掲13「七十年の回顧」一三九—一四三頁を参照。
- (92) 学報六一「研究室だより」(昭和十年二月) 二二九頁。例えば、金曜日には長倉助手による「吾妻鑑」、木曜日には植木教授の「山本大膳五人帳」の指導会が行われた。なお、学報については、『國學院大学新聞 縮刷版 創刊号—第三〇〇号』(國學院大学新聞学会 昭和四十三年) を使用。
- (93) 例えば昭和二十三年十一月には、史学第二研究室において外国史関係の研究会が行われていた事が確認出来る(学報一六七「研究室便り」(昭和二十三年十一月) 五〇三頁)。この他にも諸研究室における研究会が確認出来る。